題字：住職

ほのぼの

第5号
平成15年
11月

発　行
神戸市須磨区戎町1－2－3
TEL 078－732－5209
信行寺門信徒会

ご本山 念仏奉仕団

おめでとう ご本山 念仏奉仕団 二十回達成

今年も十月二十四日念仏奉仕団に参加しました。参加者は十九名でしたが新しく参加した方々もあり有意義な奉仕活動ができました。

信行寺の念仏奉仕団は参加回数二十回になり、本山より表彰されました。これもお世話をしてくださった方々のおかげです。ありがとうございます。

また、最初から毎回参加されました、萬董子さんが、同じく二十回の表彰をうけました。おめでとうございます。

念仏奉仕団というのは、ご本山西本願寺の清掃奉仕を通して、門徒としての意識を高めるとともに、護法の念を一層深めていこうとするものです。

信行寺では、昭和五十六年より始め、震災後、やむなく三回休みましたので、今年で二十回になりました。

みなさまも次回には参加してみてください。たのしいですヨ。

帰敬式（おかみそり）を受けて

中川さなみ

十月二十五日お晨朝の後、厳粛な中、儀式が始まり、ご門主さまがお見えになると、張り詰めた雰囲気が総御堂全体に漂い、身の引き締まる思いでした。

順に、おかみそりを受け、感動でこの日までの出来事が夢のように浮かびました。主人の突然の死に呆然自失の中で聴いたご院主さまのお言葉は心の底に深く残りました。それが御文章の「白骨章」であることも知りませんでした。

主のいなくなった生活の中で、次から次へと苦悩は消えず、助けを求めた数冊の人生論の中で親鸞聖人、蓮如上人を知り浄土真宗のすばらしさを知りました。

随分遠回りをしましたが、お寺での仏教講座にお誘いいただき、ご法話を聞かせてもらい、日々救われる思いです。聴聞は萎えた心が生きて、消えない煩悩が静まります。

まだまだ門徒としてはこれからですが、今度の帰敬式を期にいろいろな事を学んで行きたいと思います。先日、大先輩のご門徒さまが「中川さん気軽に気軽に、肩に力を入れずに！」とお声をかけてくださいました。

ありがとうございました。

合掌

『帰敬式について』

川口昭次

九月十四日、ご本山での晨朝（あさのおつとめ）の後で、ご門主さまから帰敬式（おかみそり）を受け、法名を戴きました。

私はお恥ずかしいことに、以前までは「法名は死んだ後で、葬儀を勤められるご住職によって戴くもの」と思っていましたが、昨年来の「定例聞法の集い」における、副住職さんの『浄土真宗・仏事あれこれ小百科』の勉強会の中で、「法名とは本来は生きているうちに戴くもの」と知りました。

そこで色々と聞く所では、帰敬式で授かる法名はご門主さまに依って名付けられるのですが、実際面では帰敬式を受ける人数が多いため、ご本山の帰敬式係の人が考えられているとの事です。

即ち、ご本山で戴く法名は、どんな名前になるか判らないという事なので、（こんな事を言うと不敬かも知れませんが…）少し躊躇しておりました。

この世に生を享けて何も判らない時に、親から名前を付けて貰うのは当然のことですが、成人となってから付けて戴く法名には、「私の俗名を一字入れた法名を付けて貰いたい」と思っていた矢先に、今年の四月一日より帰敬式の法名に関する制度が変わって、「お手次ぎのお寺の住職が、帰敬式を受けたい人の法名をつけ、ご本山に予め内願書を出して、ご本山の正式認可後（約二ヶ月かかり

ます）の帰敬式の時に、ご門主さまよりその法名を授かる事ができる」と、改正されました。

そこで、早速ご住職にお願いをして私の法名を考えて貰い、

「釈　顕　昭」

という法名を戴きました。これは、私の俗名の「昭」の字が這入っており、とても気に入っております。

これからは帰敬式をご縁に、今まで以上に浄土真宗の門徒としての自覚を新たにし、また、仏教に帰依し仏法を心の拠り所として生きる仏弟子として、お念仏の道を歩んで行く所存です。

毎月の行事　信行寺

毎月第一日曜日　午後二時より
護法会法座「蓮如上人御一代記聞書」

毎月第二日曜日　午後七時より
仏教講座　「教行信証」　住職

毎月第三土曜日　午前十時より
仏教讃歌のつどい　コーラス　みやび会

毎月第三土曜日　午後二時より
定例聞法のつどい　法話　住職

法義示談（信仰相談）　住職

青少年心の相談室
（仏法の質問に応じます）　副住職

月一回日曜日　午後四時～六時まで
仏教青年会　副住職

表彰状をいただいて

萬　董子

奉仕団に参加させてもらって二十回になり本願寺から立派な表彰状と記念の品をいただきました。

このように参加できたのは信行寺さんがお世話をしていただいたお蔭ですが、何よりも家族の協力があったからだと思い、心から感謝しています。

そして、私も健康に恵まれてよかったと思います。

わかったつもり

住職　米田睦雄

「なぜ人を殺してはいけないのですか?」という問題が、国立大学の入試に出たそうです。えらい時代になりました。

「生まれてこなけりゃよかった」と一言。うつろな目をして、淋しげに、ぽっつりもらした少年がいました。両親が離婚をし、母親と暮らすようになった。しかし、母親はすぐに再婚し、子供ができた。その結果、義父にも疎んじられ、実母も自分を邪魔者扱いするようになってきたという。幼児、子供への虐待は大きな社会問題になっています。

「こんな時代にだれがしたのか」と、いってみてもはじまりません。終戦後、アメリカのまねをして、物質的な豊かさと便利さを追い求めてきた生活習慣がもたらした産物に違いありません。

わたしたち一人一人と、わたしたちの子孫が、その影響を受けてゆくのですから、どこへも責任転嫁はできません。

「何ができるだろうか考えよう。できることから始めよう」という人生を、親鸞聖人は教えてくださいました。

「お念仏を称え、お念仏を聞き、お念仏に導かれて生きてゆく」。これが人生の基本です。

「わかった」と「わかったつもり」の区別をハッキリさせておくことが肝要です。わたしたちは「わかっていないのに、わかったつもりでおる」ことがほとんどです。

戦後、日本に「自由」の考え方が入ってきました。これを「なにをしても自由、なんでも勝手にしほうだい」と、間違って受けとってしまいました。

「自由」には、「責任と義務」がついています。責任と義務は、自分以外の他の人などに対するものです。それには人間以外地球のすべての生き物も、先祖や子孫をも含んでいるとみていいでしょう。ここのところを、心にとめておきたいものです。

お念仏を申して生きることは、わたしの人生が、仏になる道として開かれてゆくことです。

わたしたちは、「自分だけ得をしたい、楽したい」という性根でいっぱいです。そういう者が、仏になれることの不思議さを喜ぶとき、他の人々、他の生き物も、如来さまのお慈悲のなかに生きている事実、これを見落とさないように心がけさせてもらい、「わかっていないのに、わかったつもり」になってはいないだろうか、もう一度如来さまに尋ねてみましょう。

仏教青年会のご縁を頂いて

山本 裕賀理

私達は、今、夫婦で青年会に参加させて頂いております。西区に住んでおり、門信徒でもなかった私達が、信行寺さま、そして、青年会と出会わせて頂いた事に、本当にご縁と言うものがあるのだなとひしひしと感じさせて頂いております。

私自身、実家が、浄土真宗でありながら、まったく本当の教えを知らずに過ごして参りました。たぶん、今の社会では、私と同じ様な誤った考えを持っている人がほとんどではないかと思います。

よくわからない事件などが多い世の中ですが、今の若い人達にこそ、浄土真宗のみ教えというものが、本当に必要な気がします。

若い世代にも、わかりやすい教えをと言う事で始めて頂いた青年会。本当に素晴しい事だと思います。行く度ごとに、人数が増えていくのが、とても嬉しく思います。これからも、頂いたご縁を大切に、一日一日を生活させて頂こうと思っております。

子供の頃から

月田 幹雄

秋の彼岸法要のとき「正信偈」のおつとめの中に、可愛らしい声が聞こえてきました。それは祖母と一緒におまいりに来ている、まだ幼い小学校低学年子供の声でした。

毎朝、お祖母さんらと、おつとめをしているのか、馴れた読経で、自信に満ちた声でした。思わずほのぼのとした気持ちになりました。

いつも法要のとき住職の孫さんの空城ちゃんが可愛らしい法衣で読経している姿をみて、ほほえましく思っておりますが、ここにも、幼い子供が、一生懸命読経されている姿があり、嬉しく思いました。私も、ふと、子供の頃、母に連れられて、信行寺さんへおまいりしたことを思い出しました。子供の頃は、何も考えずただおまいりしたのですが、このことは、必ずよい思い出になり、朝夕仏壇に、手を合わす習慣になると思います。きっと心のどこかに残るでしょう。

昨今は、青少年の教育問題がいろいろととりあげられています。

子供達にどのような教育をしていくかは、大人の責任です。子供達に押しつけるのではなく、自然な形で手を合わせてお参りする。こんなことが、大人から、子供への思いやりにつながるのではないでしょうか。

夏期特別法座

コーラスみやび会のみなさん　H 15. 8. 17

第二十一回

夏期特別法座の模様

八月十七日（日）午前十一時から、シーパル須磨において勤められました。

今年も六十数名の方々がお参りになり、「すくい」について住職からの法話がありました。

法話の間に、信行寺「みやび会」の皆さんのコーラスがあり「あの空みれば」「夏の思い出」など心に残る楽しいひとときを味わせてもらいました。

文芸欄

◆投稿◆〝俳句〟

亡き夫（ツマ）の　倍以上を生き　墓洗ふ

恙がなき　余生賜はり　秋彼岸

風にのり　祭囃子の遠くから

街師走　老の戯言（タワゴト）　きりもなく

年の豆　ほつほつ噛みて　老にけり

佐藤一子

質問コーナー

住職

問い 先日「おかみそり」を受けて、「法名」をいただいたといっておられた方がおいでしたが、「おかみそり」とはどんなことでしょうか。

答え 「おかみそり」とは、浄土真宗の門徒として、こころから阿弥陀如来さまを敬い、帰依し、その教えのなかに生きていくことを誓う大切な儀式です。「帰敬式」ともいいます。

親鸞聖人が東山の青蓮院において慈円僧正より「おかみそり」を受けて、得度されたのにならっております。

ご門主さま（またはお手代わりの方）によって執り行われ、三帰依文をとなえてから、「おかみそり」を受け、法名をいただきます。

西本願寺では、毎日おこなわれています。

詳細はお寺にたずねてください。

秋の彼岸法要によせて

九月二十七日午後二時から彼岸法要がとり行なわれました。

今年の法話は、愛媛県大三島万福寺の浅野純以先生から、ご門徒の方で胃ガンを宣告され幼な子五人を遺して、四十五歳で往生された方の闘病生活のお話をお聞きし、思わず涙してしまいました。

二十八日は、住職からの法話があり、今年も有意義なお彼岸法要を終わらせてもらいました。